

渡邊國武著

天龍道人傳 全

一名竹内式部勤王始末

水心洞藏 版

天龍道人傳一名竹内式部勤王始末

目次

發端第一

考證第二

本傳第三之上

本傳第三之中

本傳第三之下

結論第四

富山

天龍道人傳一名竹内式部勤王始末

富嶺山

天龍道人傳一名竹内式部勤王始末

渡邊國武 著

發端第一

元和僊武の後即ち徳川氏政權を執るの日は當りて始の
て王政復古の大業を企てたるは、の柳子新論を著して
東面向背の論を唱へ幕府の爲めに斬罪を處せらるる
山縣大貳も非に三條橋上子俯伏して途に九淵を拜し
天下に周遊して同志を招らひ事露ハムんとするに及ひ
筑後の久留米にて自殺したる高山彦九郎も非にまじ
不恤緯と上つりて幕府を刺激し山陵志職官志等の九志
と著して王政の痛く衰へたるを奮激慷慨したる痛生君
平も非にして其実を宝曆年間京師に在りて縉紳家子

立入アカリこくも人皇百十七代桃園天皇を輔佐し奉り
心親断三條徳大寺西院岩倉以下の諸卿と俱し王政を
古く復せんと謀りたる肥前の處士竹内式部敬持と云へ
る人アそ此日本は久しく行ハき来りたる両頭政治を一
變して國民を神聖なる一君統治の下に置る人アとを思
ひ起したる勤王論者の破天荒のハアける中慮よして
事敗も忠親断三條以下の諸卿ハ夫々譴責せらま式部も
又京師を逐はまたりけむとも敢て其志を屈せし名と正
庵と改め東國に來り山縣大貳藤井右門め徒と俱し尚
其素論を貫る人とせしふまも遂に成らば再び刑典に
觸りて遠流に處せらるるける其末路を如何なる
行きけん之を知る者さらまなり

富嶺山

余ハ少年の日々の太田蜀山翁が著したるといふ書ハ傳へ
たる徳川將軍吉宗家治家重三世の事と漢文に記したる
續三王外紀と云へる記傳体の歴史を讀みたりける其
中二卷博王記に至りて始めて此竹内式部が事跡を見せ
したる博王記室曆八年の條に曰く八年丙寅西京公卿徳
大寺桜井士生以下十七人坐專修武藝並受譴或流或禁錮
終身初丹州處士竹内式部者少厭臥之苦有四年之志室
曆改元至西京教授受業者多矣終接于播紳之間亟請書微
訊諭之公卿聞之者生非望之志或學射或騎馬日請武事既
而事發覺皆為貶黜焉執式部送之東都下廷尉收之罪不極
死逐之とす同書中三卷浚王記明和三年の條に曰く明
和三年丙戌有上寢事告處士山縣大貳藤井右門謀不軌与

其遺教百人散在四方小幡候信邦與知之初大貳以善兵聞
從之受業者多矣小幡老臣吉田玄蕃津田頼母相友善既而
藤井右門至自甲州客于大貳所右門善劍字業者益衆日講
武論兵右門與竹内正庵善正庵者博王之世接于平安公卿
之間勸之武事者即式部愛名也於是拘小幡候及大行人織
田信采於其宗族織田信薦郎執大貳右門以下其怨而繫
之檄鞠向之無明證而獨可疑者評圖東都王城以是請習攻
城之術是為犯大禁云明年八月獄成梟首藤井右門山縣大
貳於鈴原加木焉流竹内正庵收小幡候信邦封土及其郎亮
之三其子信淳既而賜諸與羽中二万石之地秩如故無城之
地也削織田信采官而立其子流斬者三人以其無明證而謾
告大非也其餘連坐者尚衆矣

富嶺山

各時人口と
一して三ハ
往々

コトニテ口
知リテ
此竹内式部
事通の
時三三
是事
は為
して

余ハ茲ニ至リテ始めて元和偃武の後王改復古の大業を
首唱し且之と實際ニ着手したる尊王憂國の率先者也此
竹内式部其人なりと之を知りたりキ後天
旋り地轉りて國家維新の盛運ニ際會し其夙を聞て起り
たる山縣高山蒲生以下大凡君を憂ひ世を憤り幕府の
刑典ニ觸れ恨と呑んで九泉ニ赴きたる人々也
追賞の恩波ニ浴せざる者なかりし維新の
竹内式部其の及ハば万里の海島瘴煙蠻雨の中ニ如何
期して其末路と追一けん墓前秋風日向つて一掬の涙を
振ふとのまへつとなし
志あるは今と距るアと百有餘年前天明年間余の郷里
なる信濃の國諏訪の郡諏訪湖の近傍なる下の諏訪と云

子為め

へる山水秀麗の地子天龍道人王瑾通称と淡川虚庵と云
（一）一老人ありけり初き好んで鷹を畫き後を専ら葡萄
のこを畫けり余が幼年の頃までハ其書畫多く民間に傳
はれて屢之を見たることありし書畫俱ハ一種の神韻
ありて英氣鬱勃凡品ハ非るやうに賞へたり此人気象
超邁子して膽略人子過す其行幸の軒昂磊落跌宕雄偉な
りしことハ徃々郷里の人口に膾炙し民間の口碑に存せ
らる少からけり志ありとも此人の生處未歴甚し明らな
らひし或ハ長崎娼妓の腹に生きたる蘭人の子なりと
云ひ或ハ又鍋島侯の八男にして少年の日放蕩無頼事と
事とせり落魄して以て茲に至ると云い未し一定の後
あるを問ふがに

富島山

余ハ郷里に在るの日より久しく此人の未歴を疑ひ以て
是ハ大豪傑の士にして志を当世に得がにし者の寔名し
て迹を暗ましたるやあなとハ察したるにけりとも其
誰子なり知らんと云へるにハ未し考へ得ざりしに此
頃郷里より来たる渡邊長愼と云へる親戚の一老人に逢
ひて一夕談たまふ此天龍道人王瑾の事及いたりける
に長愼先人声を潜めて云ひけるハ此の天龍道人王瑾を
蘭人の子とも非ず又鍋島侯の八男とも非ばし其寔名を
この室曆明和通称の民竹内正庵の寔名なり再ハ刑典に
觸りて遠流に處せらるる万死の中ハ一生を得たりと云へ
とも其勇決敢為の氣ハ未し嘗て衰へた事あり海島を脱
して内地に來り東京を距るに遠くさる此下の孤坊

よト居して暗に幕府の動静を伺い尚其素論を行ハんと
せしも当時幕府の必権未ふ甚小衰へざりしを以て遂に
采はへきの機會を遇ふべし能はば志を齎らして泉下を
赴きたる不幸なる一英雄の末路をもあけりすはハ丁
そのの御里にてハ二の九騒動と称はる極訪家の内乱行
はたる時の如きも談笑して策と決し軍身東京を来りて
周旋尽力一藩を掌上に弄したるがめき伎倆を有したる
なり既に吾為めよハ祖父よりして君を為めよハ曾祖父な
る君の家の中興の祖先渡邊政隣君の如きを此天龍道人
王瑾とハ二の信友よりして日々相交通せらるるを聞
く君も一君の家兄よりして家傳の口碑有り在る有らん
とと云はるは是なり

南嘉山

是に於て乎余ハ少年の日に於て深く欽慕したる王政復
古の首唱者なる竹内式部とす嘗て深く其人と為ると
疑ひ未し其蕩倪と得るべし能はざりし天龍道人王瑾と
ハとて是同人よりして又我曾祖父なる渡邊政隣君とハ二
の信友を名しとて聞き其奇遇を感し其奇縁を驚き
漱然として言ふ所と知らば一面を書と裁して天龍道人
王瑾が嗣孫なる洪川正意君及び御里の父執老松竹亭せ
て以て其遺稿遺聞を求め一面を皇后宮大夫香川敬三君
无老院議官重野安釋君等ハ此竹内式部ハ其迹を就き取
調べたる事ありしを聞きて其材料を送付せらるる事と
依頼し其家兄鹿嶋島縣知事渡邊千秋君と謀りて曾祖
父渡邊政隣君の遺物遺稿を調査したるは此頃に至

アコ未ふ甚ふ全うしゆと云へしとも粗其事通の要領と得
たまは退食の餘暇漸次抄録して以て之と海内知己の諸
君に寄贈し其公評を希ふ事とかなま

考證亦二

余ハ今將子竹内式部本傳は形らの以前おろに
先づ精密に其遺物遺聞と抄録し以て彼竹内式部と此
天龍道人王瑾とハ全く同人にして只是一個の真龍が夙
雨雲雷交を至り並ひしゆの間に亦其頭尾鱗角を隠顯
出沒したる事返り事と一層明亮に考證して以て後
者諸君の参考に供せざる可らば
其才一證を時代の吻合にして天龍道人王瑾を文化七年
八月二十一日九十三歳にして終焉と此年よりして逆推

軍部山

六

一七九三年を溯るハ其生年ハ享保三年戊戌よりして其
詩文を集めて自ら蕉鹿篇と名つけたるものとてうち文化
四年丁卯の詩に維戊戌我以降神壽域此年九十春と云へ
ると全く相吻合せし此より由りて之を算する時ハ宝曆九
年其西京を放逐せられたるハ四十二歳の時にして明和
四年遠島に處せられたるハ五十歳の時なるべしと押して
以て知るべきなり

其才二證を口碑の吻合よりして天龍道人王瑾を嗣孫洗心
正之君より余に贈らむたる口碑之傳と云へる書中より京都
居住中ハ公卿方ノ門へ出入り由明和年中江戸へ下り山
縣大貳ト懇意ヲ結ヒ幕府ノ嫌疑ヲ受ケ三都御搦トナリ
候由其西京及び東京居住中ノ姓名ハ絶テ知レズト何



まゝいふまゝ君が一時名を精庵と改めらるゝ事ありしは
余が先師坦平先生の子渡辺元亮君之に問ふて曰く君は
祖先の名の音を取て志々名つけたりやと云ふ君其故
を解せばそい如何なる故もやと問返したるに元亮君
うち笑いて君が祖先は竹内正庵といひし人ありと云ひ
きたる事ありと問けり元亮君は謹厚博學決して戲言
を言ふべき人は非に必は據あるの言なりと云ふ其人既に死
して之と問ふよりよなきの事

其外三證を事實の吻合よりして天龍道人王瑾死せるの前
年即ち文化六年三月自ら天龍道人碑碣銘を作して畢生
の事迹を概述せり其友人の作也たる如くしる事あり
なしたるも道人の自述なること明なり其中は壯年の

事業を記して曰く時上下有大窮為欲救之約豪富輩數十
家赴東武先修鎮宅靈符之法行之聲譽大矣大小之諸家飯
依日多士庶男女請益者雜遝滿門時有侍食于家僧云東明
授與之天部之法出而籠下谷於是道人垂意避於世以
所諾浪花者志難捨徧推家計之命已下而事業欲成前是官
人中与道人有義氣相背人道人生平穎脫曾直諫之面折官
人忽觸赫怒嫉之甚竊妨之幸竟不果道人去嗚呼是天也時
未至欲何以為恨於是不可不知天命直弄將未志不再顧如
脫躑時年四十二と第一證の行算は因に天龍道人が四
十二歳の時、即ち宝曆九年よりして竹内式部が追放され
せらるゝたる一年なり廣幡傳奏並胤卿の日記宝曆九年五
月七日の條に竹内式部仕置申渡之趣為心得差越之由と

鑲錄天龍子
已前米壽延
同盟松与鶴
維德輔遊年
前世親愛親
と記さるる

あり以て見るべきなり故に此碑碣銘に記したる為欲致
之約身富華數十家といひ修鎮宅靈符之云授兵天部之云
といひすゝ編撰家計之命已下而幸速欲成官人嫉之甚
妨妨之幸遂不果といふが如き竹内式部が其事迹の世に
傳はらざるを悲しむ餘幸に任し徳信を用ひて以て其勲
王の始末を自叙し百年の後裔を好むと余が如き者の
眼光或も其低背を徹せん幸と待たるなり
其才四證を遺物遺福の考證にして今回淡川正之君が余
に示されたる道人遺物の中に中山前大納言愛親卿が其
八十八歳を祝せられたる親筆の待あり緒刷して本書の
巻首に附したるもの即ち是なり香川敬三君の後此中
山愛親卿八宝曆の幸受あるに際して藏人頭ありし

富山

が我ハ別子為に所ある一と書いて敢て其企に加擔せ
らるるにいと聞けり其の世とも同一時代にして同一
忠肝義膽の人々なるとも当時京師に在りて親密なる交際
ありたる疑ふべきは非ざる蓋篇の中に呈中山卿の詩
數首あり其中に曾披忠誠嚴帝家雷名一擊動天過切
成身退今何樂不盡乾坤雪日花と云へる七絶の如きもの
の松平越中守定信朝臣と殿中問答の事ありしと聞きえ
つに怒髪悚然と其本色を露はしたるなり他の侍
の侍に但遠くは比はれぬ一種其体を異にせし道人も
後子に悔たりしけん原稿は一筆子之を抹殺してありた
るなり

其才四證ハ名祐子関する考察にして自ら王瑾と稱した



るハ蓋其畢生の目的事業勤王の外ハおさるを以て暗子
其筆畫を姓名中ニ寓したる者ハ人々其通称を虚庵と
云いしハ隠然竹内の姓を表して竹心の虚なるを示した
る也亦知る由うし
其才六燈を天龍道人王瑾が末期の奉勳ヨリして法川石之
君が賜らむたる口碑之傳ハ道人死ニ臨ミテ大封ノ封去
ラ焼弃セシメト云フ其封書ハ常ニ何人ニモ見セザル
ヲ以テ其書ノ何タルヲ知ルヲ能ハスと何ク言ハレシテ
知るべし其末年に至るまで西京有志の縉紳諸家と往
復贈答せる機密の文書ヨリて恨を吞んで泉下ニ赴くま
当レ涙を拭つて一炬子田付せしめたる者ハ人
以上ニ奉くる所の六證を未だ甚だ完全なるハ非はと云

富嘉山

九

へども余ハ之を以て竹内式部と天龍道人と全く是同一人
異名ヨリて所謂一個の真龍が風雨雲雷交至リ並いけり
るの間ハ其頭尾鱗角を隠顯せ没したるハ口はさる事と
相徴證する足るべきを自ら信し疑ハレ
余ハ此天龍道人傳を草するに當り當時の文書諸家の目
記雜説雜書所簡遺墨に至るまで力を尽し手と尽しし借
り集めたる中ニ宙齋記一卷あり他書と異ニ全く其体と異
ニ一徹訪良房なる者を以て宝曆事變のオ一主得者弟一
主人公として竹内式部と自ら別人の如く記し此良房
が生立しし筆を起し漢文を以て宝曆年間的事變を
詳細ヨリ天明七年京師の大内裏炎焼の事と録して西
河院時名朝臣と立テ迷フ烟ノ中ニ思フゾ君が御幸

恙ナカレト云一和歌を以て其筆を止め龍鳳軒竹遊
子撰と署名し巻頭ま正親所三條文庫の朱印あり重野安
釋君ハ此書を以て當時の小説として取るは足らざる所
祿訪良房なる者も張良子房の名を象して案し出したる
一個の烏有先生なる人と言ひ香川敬三君も此祿訪良房
たる者の他の記録中は一切其名をたゞ見る事とすまを
怪ミたましが竹内式部が其末路は信州祿訪子未也祿訪
家の内乱は圖したと云一お余の説を圖きて二者の間
蓋自ら関係の在る有らんと言ひきたりしこの宙齋記な
る者の文章はまじく敷衍は過ぎて往々小説は近き所あり
まういとも當時の事情を記載するのいと詳なる年月人
名地名等のこと正確にして疑ふ可らざる當時其事は與

富山

十

うりたる者も非るよりハ此の如きこと能ハざる一因
と深く之を思ふは恐らくは是竹内正庵が変名して信濃
子未也祿訪家の内乱を鎮したるの後即ち天明七年の
頃自ら祿訪家の張良子房なりと云一お心を以て祿訪良
房と云一お一個の烏有先生と捏造し出して口を竹内
式部とハ別人の如くは之と記し一種の小説を作して當
時の事情を論述し既ち塾居入道せらるる同志の公卿
正親三條帥大納言以下の諸卿も賄ひて以て其無聊を慰
めたるものなり人其龍鳳軒竹遊子と署名したるも龍竹の
二字暗に竹内式部が末路天龍道人が自著なることを示
したるなる一余の臆断する所を此の如し故に重野安
釋君云々の説ありまも拘らざる余ハ此本傳中は往々宙齋

記と引用して以て当時の景状を写し出ほの材料と爲
せし故に後者諸君余が由緒記を引用するは高麗使臣
房と記したるは皆是竹内式部が假名変名なることと記
憶せしむんこととを希ふ
り名も考證を茲に止めて直ち本傳に移るべし而して
本傳を之と三篇に分ち其上篇を竹内式部が生立よりし
て宝曆九年追放を述せらるるは終に中篇を正庵と改名
して東嶽は未だ山嶽大貳を井右門の企に關して遠島を
述せらるるたる事迹を記し下篇を海島を脱して信濃を未
だ天龍道人王瑾まゝに淡川虚庵と稱して祿行家の内乱
と鎮して之を鎮し文化七年八月二十一日九十三歳に
て病没するは終る

富嘉山

本傳第三之上

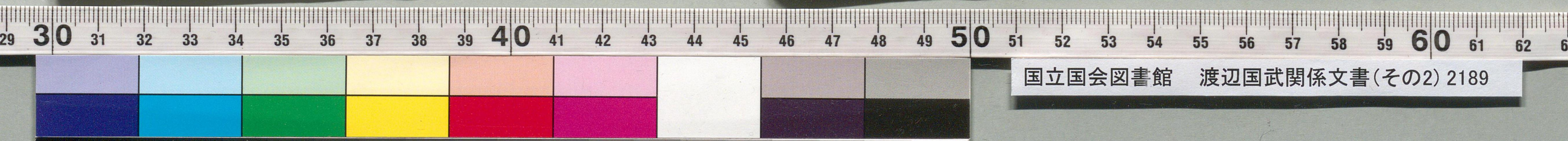
王改復古の首唱者として元和偃武の後始めて之を實際
に着手したる曠世の奇傑絶代の英雄竹内式部敬持が生
誕ハ甚く明らくなるとして諸説紛々たる此書の首に列
用したる太田蜀山翁の續三王外記は丹羽處士と何れ
香川敬三君の筆記は丹波ノ人と何れと兩説全く吻合
せりまゝ重野安禪君の越後の人なりんと言はまじたりま
志あるは其末路信州に未だ天龍道人王瑾と稱するは
及びて自ら稱して肥前の人なりんと云へり前にも云へ
る天龍道人の自述と見へたる碑碣銘も天龍道人九州
肥之人也と何れ余初を只是其本籍と押し隠す為めの假
託にして所謂英雄欺人の一手段なりんとめを思ひたる

先未殊慕故
仰看嶠水月
光在眼寒等
の句あり

一が後宙斎記を得るに及いて其冒頭子保訪良房者肥前
長崎之産とありて道人の自稱せる所と符合せるの事な
り其蕉鹿篇の中にも往々寄懐瓊浦故人の詩あり。悼馬子
清の詩の序に馬子清者肥前人也与余友善曾以其所志相
詰而無藏焉等の文字あり。重野安釋君も其後の人といへ
ば其重進放の國々即ち土籤内閣ハ加東海東山兩道甲
斐駭河肥前の外に近江丹波越後の三箇國を加へたるが
為めなりん志うれとも余ハ上文の證左に據り断して肥
前の人なりんと思へり
竹内式部の生立の事天龍道人碑碣銘に天龍道人九州
肥之人也姓王名瑾字公瑜其先大職冠鍾足公之裔五州大
大守隆造寺山城守隆信七世之孫也父忠舎人介忠隆母源

富嘉山

氏其為人也幼而明悟凡神秀徹然向有逆已者則害之其急
如求滋薪父忠隆欲制其悍勇舎而入浮圖氏金道人心不
悅隨父之嚴禮就同州獲回山安國寺泰嶽師得度矣とあり
ま宙斎記に保訪良房者肥前長崎之産其父食武門之
祿良房少壯之頃有罪其母勸切腹而死良房信量逸群自唱
以此小過何来自殺潛奔經廻西州遂登京師涉關東尋有名
之師而歷法經傳其智聰明天稟之英略自究玄妙又学兵馬
刀鎗軍謀絶倫弟子集其門殆勝由井正雪と蓋其父悍勇を
制せんと欲して僧と為したるに再い殺人等の罪あり其
母之切腹を勧めたり懼きて脱走したるなり
續三五外記にハ少殿臥之苦有四方之志宝曆改元至西
京教授受業者多矣と見へたり



まの竹内式部を京師の儒者松園仲良なる者工就きて坐
加流の神学を学ひ之を以て公卿を勸舞し復古を謀るの
方便と爲したる也（中略）白内前卿の諫奏書中ま坐加ト申
候ハ山崎嘉右衛門ト申候者ノ義ニ候誠ノ民間ノ儒者ニ
テ神書ヲ好ミ諸流ヨリ美候上思意ヲ加ヘ候野鄙ノ新流
ニテ候夫ヨリ段々相傳ハリ則當時在京ノ松園仲良ト申
候者ヨリ竹内式部へ相傳候義ニ候加様ニ段々ト民間ニ
テ相傳ハリ候流義ニ候乍併師仲良ヨリ相傳へ候事ニ候
ハハ傳へ候通り相違ナク後キ申候ハハト通り世上流
布ノ坐加流ニ少しモ違ヒ無之候ハ氏件ノ式部ニ於テハ
師傳ニ背キ思意ヲ加ヘ後キ申候ハハ坐加流ノ中ノ又新
流ニテ甚タ確カナラヌ後ニ候右ノ儀故師仲良心ニ違ヒ

富嶺山

門人ヲモ除キ候人体ニ候ハ近臣ノ輩カニ学ブベキ説
ニテハ無之候況テ上ニ直シ召サレ候事ハ甚以テ有ルマ
シク候とあり（中略）同去中（中略）自先々坐加流学ヒ候テ後キ
候輩彼此アリ仲良ナドハ數年在京候ハ氏直シキトモ思
ヒキトモ人口ニ掛ラス候故穩便ニ候式部一人ハ善キト
申シ信シ候モ甚シク又直シカラヌト申シ難シ候者モ甚
シク候故免角穩ナラス候ト是等の數言以テ其人物学識
遠く其師松園仲良の上（中略）師後ハ拘（中略）新義を唱へ
遂ニ其師と絶文ト掲立（中略）以テ教授（中略）在りて堂
上地下と凡靡ト一トを籠絡するの気概ありたるの一斑
を見る（中略）べきなり

續三五外記の記せる所ニ從へハ竹内式部が京師ニ来り

多岐山
徳大寺家
の諸大夫と多岐山

竹内式部
の教授の業を創めたるハ宝暦元年辛未の年
西京の住居ハ其罪案ニテ
之助借屋ニ罷在候内式部と有り
高三條木屋町
四ノ高ノ後ハ
人々

了教授の業を創めたるハ宝暦元年辛未の年
西京の住居ハ其罪案ニテ
之助借屋ニ罷在候内式部と有り
高三條木屋町
四ノ高ノ後ハ
人々
徳大寺家
の諸大夫と多岐山
竹内式部の教授の大要を其罪案中ニ
經學バカリ
指南致
候由申立候へ氏請獻遺言等堂上方へ
講談イタシ
何
吉田二位より廣橋傳奏兼胤卿ヲ
賜アタル由中ニ
解キ
方ノ筋モ心シカラス三種神意ノ
儀ヲモ慮ニ
解候由且神
出ノ外儒書并保建大記ヲ
講ニ
愈術ナドモ致
候由兼リ
候迄ニ
候とリ
ア
此兼胤卿ノ所司代松平右京大夫

富島山

式部の字尻を記したる中ニ

子渡一たる覚也中ニ日本ノ帝王ハ日神ヨリ
今ニ至
リ御一姓御相續ノ事異國ニ
無之儀天下万民不
奉仰者ハ
ナキ事也然ルニ
當時將軍アルヲ知テ
天子アルヲ知
ラサル者多シ是甚可
歎事也
是
何故ナレハ君臣不
学不徳
ヨリ事起レリ然レハ
天子ヨリ諸臣ニ到リ
学ヲ修メ徳ヲ
積ムヘキヲ專一也
左アラハ兵ヲ用ヒ
ス手ヲ下サスニテ
自ラ如昔公家一統ノ
御世ニモ成ヘキヲ
天地自然ノ道理
ナリ
古
今ノ治乱ヲ當時ニ
引競ヘ申候様ノ事
ハ或
ハ保元平治物語太平記
ヤウノ事共ヲモ辨
テ引出シ辨テ
付候テ夜キ候由
相聞候事等ノ語
あり九條右大臣尚実
卿が綾小路宰相某
を召し寄せらま
式部教旨の事と尋ぬ
ひし事と兼胤卿其
日記中ニ録して曰
く於日本天子程貴

キ御身柄ハ無之候ニ將軍ヲ貴シト申候ハ人々モ存知天
子ノ貴キヲ不存候子細ハ如何ノ候ニ可有之武皇ハ天子
御代々御学向不御不徳臣下モ自白已下何レモ非器無
才故ノ候ニ候天子ヨリ諸臣一統ニ学向ヲ被勵五常之道
備ハリ候ヘハ天下ノ万民皆服其徳而天子ニ心ヲ寄セ自
然ト將軍モ天下ノ改統ヲ被返上候様ニ相成候儀ハ必定
矣如及掌公家之天下ニ相成候ト宙斎記ヲま縉紳數家
招請令縉倭漢之軍也太平記評論之時縉紳傾耳之中多歎
朝廷之衰運悲官祿之如形之間公卿殿上人各不現矣言
徳慨愁之端顯也或夜有三國志之談及吳子蘭王子服吳碩
馬騰事高野殿曰當時我朝能似漢帝何無吳碩馬騰之忠臣
乎岩倉殿曰若有如此臣者如之何高野殿曰於有之者昔君

國語山

何効漢帝守園池殿曰忠臣英才十室之邑不待尋搜目前即
得之中院殿曰王子服吳碩今在茲公等吳子蘭董永也岩倉
殿曰未伐曹操之馬騰且無劉備而王子服之類何敵之乎今
吳子蘭等小祿力不足慨歎良久心親所三條殿曰各忠志願
然今追後醍醐之昔宸儀親政之謀略當時之樞要也一坐無
異議決其策既而其人及二十人ト云ヘラるめき其一端を
見るヘ一續三王外記ト正信書微正信之正と記したるハ則
ち思ふなり

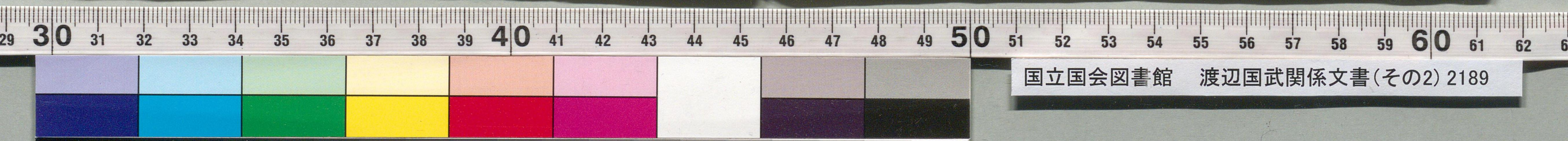
竹内式部ハ深く王朝の衰微を悲シ幕府の專横を憤る
よくして其門下正卿殿上人等を鼓舞作興して以て王
政復古の大業を成らんとせし其門人の中徳大寺大納
言公城久我大納言敏通正親町三條大納言公積鳥丸大納

言先胤坊城中納言俊逸中院左中將通維高野右中將隆古
西洞院少納言時多甚解由小路左中將資名岩倉權中納言恒
具同右兵衛佐尚具^等の二十餘卿、君を憂ひ世を憤るの
念益慍く其師竹内式部を以て謀主と爲し、密に連署血
誓し了以て王政復古万機親裁の大業に着手せらるる
宙齋祀より此時の事を託して曰く會合之夜德大寺殿
曰固志之證以連署誓神明理之當也衆實稱善即連署之
人々德大寺殿中院殿烏丸殿高倉殿西洞院殿高野殿園池
殿正親所殿條殿接井殿岩倉殿西大路殿姉小路殿今之川
殿裏松殿等二十餘人也於地下者可為別紙乎有評後德大
大寺殿曰密牙在緒肆且於義心堂上地下豈有差乎衆於
善と嗚呼此德大寺公城卿が於義心堂上地下豈有差乎哉

富嘉山

の一語と衆稱善、當時此諸卿の眼中既に内閣の勢
習一點をも存せし以て下^明卯^維辰^新の鴻業と途々相暗合せ
る所あるを見るべきなり

今上桃園天皇禱ハ遐仁先帝按所天皇亦一の皇子にして
延享四年丁卯即ち西洋紀元一千七百四十七年御年僅に
七歳にして^之徳^之よつらせぬ、聰明絶倫古今獨歩の英主な
り室暦五年^{乙未}御年己未十歳にたりしに因り徳大寺
久我の両卿密に謀後せらるる所あり香川敬三君の筆
記中此事は就き岩倉前参後左近衛中將具集卿の信と銘
して曰く桃園院^{乙未}御年己未十歳にたりしに因り徳大
寺公城久我敏面^{乙未}君徳を倍養スルヲ以テ急務に思量惟
こ後奏東久世宰相通積ト高後シテ山崎富齋ノ学後ヲ聞



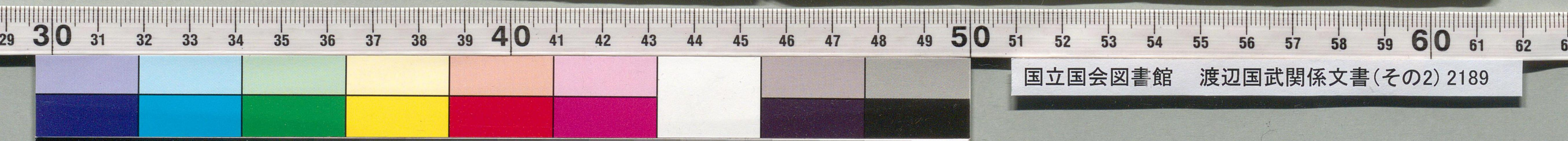
こ召し玉ハシテ言上アルニ桃園院帝ハ速ニ採納シ玉
フ因テ侍後伏原直條ハ其師竹内式部ノ後ニ依リ大学章
句孟子集注ヲ進請シテ桃園院帝ノ山崎闇斎ノ学説ヲ聞
シ召シ玉フハ後光明院帝ノ漢唐ノ古注ヲ捨テ、程朱ノ
新注ヲ取リ玉ヒ侍後ノ堂上ニ我ヨリ古ヲ為スト仰セ玉
玉ヒシ聖慮ニ劣ラスト有志ノ堂上ハ皆在躍感喜セシト
ソ此後同七年ノ夏ニ至リ正親町三條公積西河院時名ハ
後奏婦小路大納言公文ト高後ニ更ニ神書ヲ聞シ召サン
テ言上アリ桃園院帝之ヲ允シ玉フ徳大寺公城坊城俊
逸高野隆古西河院時名及ヒ白川右中將資顯等ハ小番毎
ニ更ル々々日本紀ヲ進請シ皆竹内式部ノ後ヲ用井ラレ
ト夫王政復古の大業ヲ企てんと欲スルニ先ツ其

富野山

此の如きも皆且之竹内式部ヲ持論識見ヲ出ツルハ固ヨク
論ナリト云ヘトモ諸卿ノ能ク其師説ヲ実行シ桃園天皇
ノ速ニ之ヲ採納シテ君臣遭遇実ニ千載ノ一時なる也
此の如きも皆且之竹内式部ヲ持論識見ヲ出ツルハ固ヨク
論ナリト云ヘトモ諸卿ノ能ク其師説ヲ実行シ桃園天皇
ノ速ニ之ヲ採納シテ君臣遭遇実ニ千載ノ一時なる也

桃園天皇曰ク諸卿ヲ集メ儒書ヲ讀シ神道ヲ論シ頻リ
治四平天下の大経大法ヲ規畫シテ予申テ近衛白内
前卿ハ一條前白道香公九條右大臣尚実公鷹司内大臣輔
平公其心甚ク安ク女院即ち接断天皇の皇后昔緝門
院ノ講ヲ奉テ天皇ハ極禱シ奉テ垂加流神学の進講ヲ停
止奉らんとして其の事起マ余今其詳細ヲ説かんとして
る以前ノ後者諸君ハ一言セザル可らず者也今日よ

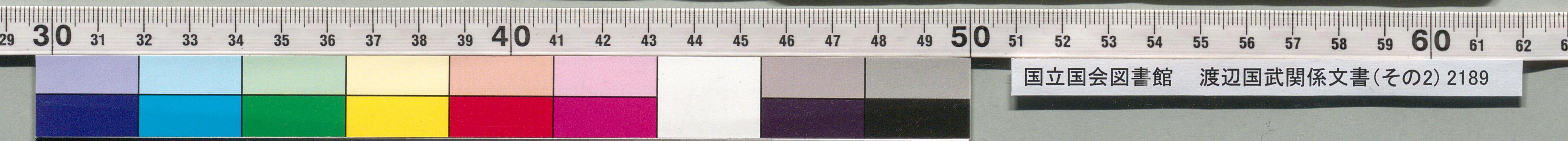
公香川教三君の筆
此の如きも皆且之竹内式部ヲ持論識見ヲ出ツルハ固ヨク
論ナリト云ヘトモ諸卿ノ能ク其師説ヲ実行シ桃園天皇
ノ速ニ之ヲ採納シテ君臣遭遇実ニ千載ノ一時なる也



已して之を見き此四公が強て其左右の近臣と退けん
事と奏請して桃園天皇として朕ノ股肱汝等の断つ所ニ
任カスの勅指と（？）しめ奉る事至りたるハ甚く專横不
臣なる可如しといへども其実を決して然らば此時は是
徳川九代將軍家治執柄の日よりして八代將軍吉宗中興の
餘炎未も衰へば一朝若し関東よりして難向を発せざる等
の事何くば其禍の及ぶ所ハ特て左右の近臣數十輩のミ
み止らばしり或も兼久の獲轍は陷ること何人も見ら
可らばしりの懸念ありたるなりん（？）さばバトを彼に親断三
條徳大寺以下の諸卿を謹責せらるるたるハ宝曆八年七月
よりして竹内式部が獄の完結に至る待とばす一切幕府
よし謀らる事なく卒徒の間より之を発せらるるなり

富嶺山

兼胤卿日記宝曆八年七月二十五日の條子所司代松平右
京大夫輝高が榊原廣橋両傳奏に向つて今度御咎之候被
仰出候前多人數の候ニモ候間関東へ御懸合モ可有之事
ニテハ無之哉との尋問を發したる事あり同二十六日の
條子申刻迄兩人参下白殿申半刻許松平右京大夫参入
於小書院被認西人候同席殿下思召之趣密々右京大夫へ
被仰聞右之通故暫時は咎猶豫難成撰家中一統被取計夫
故前以右京大夫へ不被達候此處右京大夫賢峯直関東へ
可達之由被命等の事あり一が數回往復九月九日に至り
て始めて撰家衆（？）人より申達候事老中へ申達候處
委細兼知直濟候其段及言上相濟候此段撰家衆并兩人
へ可申達之段老中其ヨリ申達候との返答を得たり當時



の勢以て見るべし若し之を今日の政論に比して言
ハ急進漸進集権を推種々其意見と異なりと云ふ
同一く是國家の安危と負担をもち者にして其意見と異
なるが為め一と正しく又他と云ふて容易に論断を
可らざるが如し
幸しれども謀竹内式部の後を嫌忌したるハ一條前所白
道香公より近衛白内前公は忠告して其不可なるを
後く内前公後奏葉室権大納言頼要卿は治部卿盛仲の
の西卿を謀招きて之を謀らる葉室卿ハ其を以て
無所存候しとのちと云ふハ叶も「御内々之は事不苦
所候之様所存候と云ふくは白く傳奏され
ふ大御之兼胤柳原大御をこの雨卿より之を候ら

富嘉山

